論文の内容の要旨

論文題目　Individual differences in personality stability and change across the life course: With focus on differential susceptibility
(ライフコースにおけるパーソナリティの変化と安定性の個人差の検討：被影響性の観点に着目して)

氏　名　　川　本　哲　也

パーソナリティ特性とは，環境からの刺激に対する，比較的安定した思考，行動，感情のパターンを指す，個々人のふるまいの傾向の個人差を概念化したものである。今日，ビッグ・ファイブと呼ばれる，パーソナリティ特性が 5 つのドメインから構成されると考えるモデルが広く用いられるようになってきており，パーソナリティ特性の変化と安定性に関する研究も，このビッグ・ファイブに基づき知見が積み重ねられてきた。その中で，パーソナリティ特性の各ドメインが生涯にわたってどのような発達軌跡を辿るのか，また時間の経過の中で相対的にどれほど安定しているのかということについては，特に数多くの知見が見いだされてきている。その一方で，パーソナリティ特性の変化と安定性の個人差についての研究はいまだ発展途上であり，特に変化と安定性の規定因を探る研究は，その個人差を十分に説明できていない状況が存在していた。

また，パーソナリティ研究では，人の進化という観点から議論を行う必要性が叫ばれており，有機体を取り囲む環境への適応戦略としてパーソナリティ特性を捉える見方が提唱されてきた。そのような背景の中で，環境からの影響の受けやすさにおける個人差が注目を集めており，被影響性として概念化され始めている。被影響性は，ビッグ・ファイブ等の一般的なパーソナリティ特性とは異なる次元の，遺伝的基盤を持つ個人内特性であり，人の進化の過程の中で自然選択により維持されてきたと考えられている。この視点は，被影響性の高い個人が，良い環境からよりポジティブな影響を受け，望ましくない環境からよりネガティブな影響を受けることを想定する (次ページ Figure 1 を参照)。本研究では，発達研究の一領域として行われてきた，パーソナリ

ティ特性の変化と安定性の規定因を，進化的議論を背景に持つ被影響性の観点から再考することを主たる目的とした。そして，この目的のために以下の 4 点を下位目的として設定した。

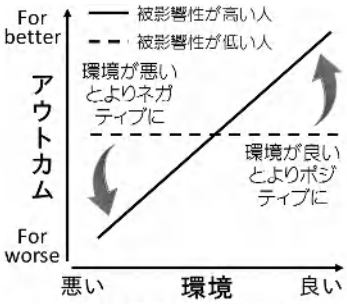

Figure 1 被影響性の概念図

- パーソナリティ特性の変化と安定性の広範な個人差の存在を検討する (Chapter 3)
- パーソナリティ特性の変化と安定性に遺伝的要因と環境要因がどれほど寄与するのかを検討する (Chapter 4)
- ライフイベントがパーソナリティ特性の変化に与える影響について被影響性の観点から検討する (Chapter 5)
- 日常生活の出来事がパーソナリティ特性の変化に与える影響について被影響性の観点から検討する (Chapter 6)

Chapter 3: パーソナリティ特性の変化と安定性の広範な個人差の検討

数多くの先行研究により，人のパーソナリティ特性が母集団のレベルで平均的にどのような発達軌跡を辿るのかについて，欧米圏や日本における知見が積み重ねられてきた。Chapter 3 ではその生涯発達の過程において生じるパーソナリティ特性の変化と安定性に広範な個人差があることを検討した。東京大学教育学部附属中等教育学校のアーカイブデータ (N = 3656) に対し，階層線形モデリングの手法を用いてパーソナリティ特性の変化と安定性の双方に有意な個人差が存在することを示した。またその個人差の一部はコホートという社会文脈的な要因や性別により説明されることが加えて明らかになった。Chapter 3 の結果は，パーソナリティ特性の変化が個々人の属する社会的な文脈の影響を受け得るものであることを示唆している。さらに，コホートからの効果は社会情緒的側面の発達における年次遷移を意味し，発達における時代性の観点からも重要な知見といえる。

Chapter 4: パーソナリティ特性の変化と安定性における遺伝と環境

Chapter 3 ではパーソナリティ特性の変化と安定性の双方に広範な個人差が存在することが明らかとなったので，Chapter 4 ではその個人差が遺伝的要因と環境要因のどちらに起因するのかを検討した。東京大学教育学部附属中等教育学校の双生児サンプルデータ (一卵性双生児 N = 273; 二卵性双生児 N = 48) を用い，行動遺伝学的分析を試みた。その結果，パーソナリティの相対的安定性に対しては，遺伝的要因と環境要因の双方が有意に寄与しており (Figure 2 を参

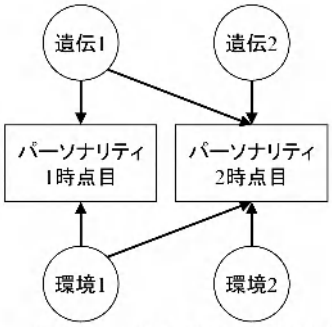

Figure 2 Chapter 4の行動遺伝学的分析のモデル図

照)，特に遺伝的要因の寄与が大きいことが示された。その一方で絶対的な得点の変化量に対しては，こちらも遺伝的要因と環境要因の双方が有意に寄与しており，特に環境要因の寄与が大きいことが示された。Chapter 4 の結果は，個々人の複数の遺伝子の影響がパーソナリティ特性の通時的な安定性をもたらし，その一方で個々人が別々に経験する環境中の多様な経験がパーソナリティ特性の変化をもたらすことを意味している。しかし，絶対的な得点の変化に対する遺伝的要因からの影響も有意に認められ，これは被影響性という生物学的基盤を持つ個人内特性がパーソナリティ特性の変化に寄与している可能性を示唆するものである。

Chapter 5: ライフイベントがパーソナリティ特性の変化に与える影響―被影響性の調整効果―

Chapter 4 ではパーソナリティ特性の絶対的な得点の変化に対して有意な遺伝的要因からの影響が認められ，被影響性がパーソナリティ特性の変化に関与している可能性が示唆された。続く Chapter 5 では，被影響性概念の背景にある進化的議論に注目した検討を試みた。被影響性に関する議論では，個人が身を置く環境が変化しやすく不安定なものであるほど，その不安定な環境に適応すべく被影響性という環境からの影響の受けやすさは高くなり，一方で変化のない安定した環境に身をおく個人では，その環境に高度に適応するために被影響性は低くなると考えられている。この議論に基づき，Chapter 5 ではライフコースの多様性を統合的に説明する生活史理論に着目した。生活史理論は，人を含めた生物が幼少期における生育環境の劣悪さや不安定さという刺激を手がかりとし，幼少期に先の見通しが立たない不安定な環境に身を置いたものほど，不安定な環境に柔軟に順応するような適応戦略をとり (low-*K* と呼称)，一方安定した環境に身を置いたものは，その安定した環境に特異的に順応した適応戦略をとる (high-*K* と呼称) ことを主張する。ゆえに生活史理論の仮定する戦略の個人差 (生活史戦略と呼称) は，被影響性が想定する環境からの影響の受けやすさを反映していると考えられた。そこで Chapter 5 では，一般成人サンプルを対象とした 2 時点の短期縦断研究を行い，① 環境要因の中でも強いインパクトを残すライフイベントがパーソナリティ特性の変化に影響し，かつ ② ライフイベントの影響が特に low-*K* な個人においてより強くなることを検討した。成人サンプルデータ ($N = 1051$) を対象に，潜在差得点モデルを用いた分析を行った結果，複数のライフイベントがパーソナリティ特性の変化に効果を持ち，かつ low-*K* な個人においてライフイベントからの効果がより大きいことが明らかにされた。一方，high-*K* な個人ではライフイベントからパーソナリティ特性の変化に対する統計的に有意な効果は認められず，被影響性が仮定する交互作用 (Figure 1 を参照) を支持する結果が得られた。Chapter 5 の結果は，これまでライフイベントの経験の有無から説明されてきたパーソナリティ特性の変化の個人差に対し，被影響性という影響の受けやすさの個人差に新たに着目することで，パーソナリティ発達という複雑な現象をより詳細に説明することを可能にした。これは昨今注目を集める人―環境交互作用の観点から見ても重要な知見といえ，今後の発達研究へ大きな示唆を与えうる。

Chapter 6: 日常生活におけるパーソナリティ特性の変化と被影響性

Chapter 5 では，生活史戦略の個人差がライフイベントからの影響を調整することを明らかにし，生活史戦略が被影響性の個人差を反映している可能性を示した。続いて Chapter 6 では，① 環境要因の中でも個々人が経験する日常の出来事がパーソナリティ特性の変化に影響し，かつ ② より具体的な生活史戦略の指標であるアタッチメントの安定性に着目して，日常の出来事の影響が調整されうるのかを検討した。大学生サンプル (N = 1000) を用いた 2 時点の短期縦断研究の結果，対人関係における不安が高い者においてのみ，日常のネガティブな出来事がパーソナリティ特性のネガティブな変化を促すことが示された。しかし，日常のポジティブな出来事のポジティブな影響においては想定された調整効果が確認できず，被影響性が仮定する交互作用 (Figure 1 を参照) を部分的に支持する結果となった。Chapter 6 の結果は，日常生活の出来事が持つパーソナリティ特性の変化に対する効果を示した。この結果は，パーソナリティ特性の変化と安定性のよりミクロなメカニズムの検討の必要性を新たに提示するものといえる。加えて，生活史戦略の個人差に反映される被影響性が，部分的な形であれより具体的な指標によって表されたことは，被影響性の行動レベルでの測定方法の模索に示唆を与える結果といえる。

Chapter 7: 総合考察―パーソナリティ特性の変化と一貫性に関する研究の展望―

一連の研究から，パーソナリティ特性の変化と安定性の広範な個人差は，ライフイベントや日常生活の出来事のような環境要因によって説明されること，そしてその環境要因からの効果は，被影響性という環境からの影響の受けやすさによって調整され，被影響性の高い人はより強く環境要因から影響を受けることが示された。パーソナリティ特性の変化と一貫性に関する研究は，パーソナリティをはじめとする社会情緒的特性全体への研究関心の高まりに鑑みても，今後より一層進展していくことが予想される。今後は被影響性に着目をして，どのような人がより影響を受けやすいのかをより詳細に明らかにし，教育・臨床現場へと知見を活かしていくことが重要であろう。